



第73号

公益財団法人新潟教育会
(新潟教育会館内)

代表理事 伊藤 充

〒950-8104
 新潟市中央区西大畑町590番地3
 TEL/FAX 025-222-2971
 URL <http://kyouikukai.jp>
 E-mail 事務局 jima@kyouikukai.jp
 研究所 kenkyujo@kyouikukai.jp

休館日 月曜日

講師プロフィール

東京都生まれ。1979年東京大学教育心理学科卒業。東芝市場調査課勤務の後、東京都立大学大学院心理学専攻博士課程中退。心理学博士号取得。大阪大学大学院助教授等を経て、現在、MP人間科学研究所代表。

自己物語法の提唱者として青年から老人まで幅広い年代の人たちの語りを聞いて回るとともに各地で教育講演を行ってきた。

〈主な著書〉

- 「上から目線」の構造
- 「すみません」の国
- 「人と上手につきあえる子ども」に育てる36の処方箋
- 「自分はこんなもんじゃない」の心理



平成25年度 夏季大学講座

25. 8. 3

朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター
マリンホール

かかわりが難しい時代の気持ちの伝え方

榎本 博明 様

雑談のススメ

新潟市立小針小学校

栗田 貫

わたしの小学校時代の担任だったT先生は、よくわたしに話しかけてくれた。家族のこと、部活のこと、趣味のことなどいわれる雑談である。わたしはその先生が大好きだった。その先生から沢山叱られたが、T先生を信頼していた。

褒めて子どもの個性を伸ばすことは素晴らしいことである。しかし、それだけではレジリエンス（立ち直る力・困難を乗り越える力）は育たない。

榎本先生の講義を聞いて、昔の温かくも厳しかったT先生を思い出していた。

これからの課題

中之島中央小学校

岡田 順子

「ほめて伸ばす」が当たり前に言われています。「そのままのあなたでいい」というメッセージも多用されます。しかし、それだけでは子どもを伸ばせない、という現実には教室では苦しみます。

今回の講義では、叱られること、もつと頑張ることは心を鍛えるために必要だと明言されました。つかえていた物が落ちるような思いで聞きました。

傷つきやすい子どもたちは、少しのことで崩れてしまいます。心を鍛えるかかわりを工夫していかなければいけません。学校の大きな役割と感じました。

かかわりが難しい時代の気持ちの伝え方

MP人間科学研究所代表

榎本博明様

一 情緒的コミュニケーション

最近、コミュニケーション、つまり伝える技術が話題になっています。しかし、論理的に伝えるだけでなく、理屈が伝わらなければなりません。日本の文化的風土では、論理よりも気持ちが大切です。

例えば、生徒と教師で気持ちがつながっていないと、注意する際にも好意的に汲み取ってもらえません。気持ちがつかないといないと、同じ事を言ったとしても曲解されたり、反発されたりします。つまり、言葉そのものの問題ではないのです。大事なものは気持ちを伝えること、気持ちを伝える方法をコミュニケーション、つまり情緒的コミュニケーションです。論理的コミュニケーションよりも、情緒的コミュニケーションが大事ということなのです。

二 上から目線を嫌う

学生たちから「あの上から目線、マジむかつく」などの言葉を聞きます。教育や企業組織の現場では、上から目線を嫌う若者が増えているようです。

上から目線の言葉には、「悪い上から目線」と「いい上から目線」があります。「悪い」とは、言葉で言わなくても非難的な態度が伝わったり見下したりした言い方です。「いい」とは、経験を積んだ人がそうでない人に、教育や継承のために上からの立場で話すことです。ところ

が、最近はいいい上から目線の言葉にも反発する若者が多いようです。このことから、現在は、縦の関係になじまない、横の意識が非常に強い時代であると言えます。これをけしからんと言っても、仕方のないことです。では、その中で教育力を発揮するにはどうしたらいいかという、身近に親しめる存在になることが大切です。強がっている子も、親心的ないい上から目線の言葉を求めています。

三 「そのままの自分」でいいの?

「頑張れ」と声を掛けられると「いいですよ、このままで」「俺、オンリーワンですから」などと聞き直る若者が多いです。これは、心のケアのキャッチフレーズである「そのままの君でいいんだよ」が広がり過ぎてしまい、日頃から「そのままでもいいんだ」と感じてしまっているのです。これは、大変危険な考え方です。この言葉は、心が大きく傷ついて立ち直れない時に、カウンセリングで保護するために使用する言葉です。必要なのは、これとは正反対の、「困難を乗り越えていくけるように負荷を掛けて鍛えていく日頃の教育」だと思っています。

「世界に一つだけの花」の歌詞「…もともと特別なオンリーワン」だけに注目せず、「その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい」にも目を向けて

ください。オンリーワンになるために、一生懸命になることが大事なのです。しかし、一方的に言うのと、押し付けがましくなりません。人は気持ちで動くと言いますが、大事なものはモチベーションです。やらなければならないから上がるのではなく、良好な人間関係による気持ちの面で、モチベーションは上がるのです。

四 人間関係が苦手

人とのかわりに困難を感じる若者が増えています。対人距離失調症と言いますが、人の距離の取り方が分からないのです。昔の対面世界で自然と鍛えられていたものが、現在のネット世界では、対面を軽視しているためにコミュニケーション力が磨かれません。多くの大学では、勉強よりも友達づくりの支援の方が課題になっているほどです。では、どうしたらいいのでしょうか。それは、時間をかけて人に慣れさせることが大事です。

友達とは本来、気を遣わないで何でも言える間柄です。でも現在は、友達だからこそ気を遣う、というケースが多くなっています。どうしてそうなったかという、近所の遊び集団の消失が大きな要因だと思えます。昔は生活の中で三つの関係性（特に親しい友達、普通の友達、仲の悪い友達）、三つの目線（年上、同年、年下）を日々体験していました。しかし、現在は仲のいい友達数人とネットにつながったまま成長し、様々な人間関係を経験しないまま社会に出てしまうのです。だからこそ、幼児期、小、中学校のうち

学校という組織で対応していかなければなりません。

だからといって、若者が人間関係を拒否しているかという、そうではありません。プログやツイッターなどから分かるように、むしろ切に求めているのです。それと同時に「拒否されるのが怖い」という心理が働いています。

五 傷付きやすい

レジリエンス（復元力）が低い学生が多いです。これは、若者が鍛えられていない、というだけでなく、叱られていないとも言えることができます。

また、「褒めて育てる」ことが強調されるようになって、傷付きやすい、落ち込みやすい子どもが増えています。気持ちを通じ合えるようにすること、それに加えて、心を鍛えていくことをしないと、本当の教育はできないと思うのです。その際には、性格の個人差を考慮した対応、保護者を巻き込むことによって理解を得ることが必要です。

大学は、母性原理が強すぎて、心を鍛えるという場にはなれません。もっと、下の世代の頃にやっておかなければなりません。小、中学校で鍛えながら、レジリエンスを高めていくのです。そのためには、父性原理を注入して、褒めながら思いを引き出す対話ができるようにしなければなりません。厳しく言っても好意的な解釈ができるように、日頃から気持ちの交流をすることが大切なのです。このように、厳しさを注入して鍛えることが、本当の教育なのです。